

## 語られるべき「私」の生成——日露戦争後の『太陽』に即して——

山口直孝

### 一、「自己表象テキスト」の起源をめぐる問い

一九〇〇年代から一九一〇年代にかけての文芸史を記述する際に、自然主義が中心の話題となることは、常識であろう。一九〇七年・一九〇八年前後を最高潮期とする自然主義の提唱と実作の試みとは、近代における最大の文芸運動として一般に位置付けられている。それは、人間観の転換を表すものであり、表現改革を推進するものであった。西欧的な個我意識に触れた文学者たちは、自らの思考や感性を拠り所にして創作を試みていったが、同時に彼らは自己を取巻くさまざまな制約に直面する。国家権力による言論弾圧といった外部の力は当然のこと、文学者は、内なる束縛をも意識せざるをえなくなる。彼らは、自身が先祖や家族と血縁で結ばれていることや動物と同じく性欲から自由になれないことを、切実な課題として引き受けていった。作家の認識の変化には、進化論や遺伝学などの影響が著しく、それらもまた西欧化によってもたらされたものと言ってよい。負の要素を持つ自己を対象化するため新しい描写方法が求められ、言文一致体を積極的に採用する文体実験が盛んに行われた。語り手が透明化し、主人公の内面提示に比重が置かれる小説の型が整い、次代に受け継がれていく。従来「私小説」の濫觴と見なされ、最近では「自己表象テキスト」<sup>①</sup>（日比嘉高）と再規定された作品の大量発生は、文芸史

的に一つの画期となるものである。

自然主義と「自己表象テキスト」との関連を探ることは、重要な課題である。けれども、その作業は、テーマや文体の相互関連性、あるいは主人公の思考や振る舞いを対象とするだけで充分なわけではない。最初に述べた概括にしても、文学者に即したものであり、偏りがあることは確かであろう。「私」という存在に目を向け、自己とその周辺に興味を限定することも判断行為であり、そこには紛れもなく政治性が働く。作品の狭さが現実のいかなる部分を反映しているかを考えるためには、書き手が無意識の内に切り捨てた要素に目配りしなければならない。後景に退いているもの、名前を与えられていないものを拾い上げていくこと、また、テキストから締め出されたものの痕跡を追うことは、一つの手続きとして有効であろう。

二〇世紀初頭は、まぎれもなく帝国主義の時代であった（そして、グローバリズムが席捲する二一世紀の現在、帝国主義の時代はなお続いている）。金融寡頭制が要請する資本輸出を行い、再収奪の循環システムを築き上げることを目的に、ヨーロッパおよびアメリカは、支配地域の拡大に乗り出していく。レーニンは、事態を次のように要約する。

帝国主義は金融資本と独占との時代であるが、この金融資本と独占は、自由への熱望ではなく、支配への熱望をいたるところにもちこんでいる。あらゆる政治制度のもとでのあらゆる方面の反動、この領域における諸矛盾の極端な尖鋭化、——これがこれらの傾向の結果である。民族的抑圧と併合への熱望、すなわち民族的独立の破壊（なぜなら、併合は民族自決の破壊にほかならぬから）への熱望もまた、とくに激化する。<sup>(2)</sup>

各国の植民地侵略が飽和状態に達していたため、さらなる拡大の欲望は、列強国同士の利害の衝突を生む。第一次世界大戦を初めとするこの時期の戦争の多くは、植民地の再分割闘争であった。むろん、日本の近代史も、そのような帝国主義の潮流と密接に関連する。台湾出兵、江華島事件を契機とした朝鮮への干渉、琉球・小笠原諸島の帰属など、日本は、文明開化

期より周辺地域への欲望を露わにし、日清戦争を経て、宗主国の地位を実現していった。朝鮮・中国における利害衝突が直接の原因である日露戦争は、植民地再分割闘争の典型と言える。西欧の脅威を感じながら、富国強兵政策を推進した日本は、先行資本主義国に追いつき、覇権を争うまでになった。日本は、中国と不平等条約を結び、朝鮮を併合する。それは、正しく「民族的抑圧と併合への熱望」にほかならず、かつて欧米が日本に向けた支配の論理の反復という側面を持つ。

労働力・資源・生産物の収奪を合理化するために、あるいは宗主国と植民地との発展の不均衡を自然化するために、さまざまなイデオロギーが学問の装いの下に利用されていた。通俗化された進化論・遺伝学・人類学の理論や、世界を測量し、分類する地理学・博物学の知見などは、その代表例である。それらは連繋しながら、地域・性差・民族・階級を序列化し、体制に奉仕していった。特定の少数者が優位に立つことに合理的な根拠はなく、しかしそれだけに多数を分断する主張は変奏されながら、常に張り巡らされることになる。貧富の格差を当事者の属性に還元し、差別の根拠とすることは、貧富の格差を必然的にもたらす帝国主義国家において、統治に欠かせない発想であった。日本の場合は、支配層の意識に「オリエンタリズム」<sup>③</sup>（サイド）が加わり、さらに屈折を帯びることになる。東洋への蔑視を基調とする異国趣味を内面化し、アジアや辺境の民を捉えようとする態度は、劣等感を通過しているだけに、攻撃的な傾向を免れない。福岡良明は、近代日本のナショナル・アイデンティティの根幹に「普遍的な「西洋」に対する「エディプス・コンプレックス」があると捉え、「特殊なものとしての「日本」は、根源的、本質的に存在しているのではなく、「西洋」からの承認の要求と、それに適合した自己像を紡ぐために見出される「辺境」との差異／類似という二重の契機を搔い潜って初めて描かれ得るのである。」<sup>④</sup>というように、複合的な自己像の形成過程を要約している。経済的に収奪されていた朝鮮・台湾・沖縄・樺太・小笠原諸島は、また地方の農村部は、西欧に比肩しうる日本というセルフ・イメージを国民の多数層に浸透させていくために、未開・野蛮・怠惰・不衛生などの語によって形容され、貶められていった。しかし、一方でそれらの地域は、日本の一部として同一性が保証されなければならない空間である。「辺境」をめぐる発言は、両義的とならざるをえず、「日本」のナショナル리티の存立

基盤や定義がゆらぎ、ときにナショナルなものに回収されざる残余が生起しつつ、一方で、そこからまた新たなナショナルリテイが再構成・再生産される<sup>(5)</sup>「運動が常に起こることになる」。

一九〇〇年代から一九一〇年代は、西欧および東アジアとの関係変化によって日本人の自己意識が再編された時期であった。「自己表象テキスト」の誕生は、そのことと独立して起こった現象ではない。一見私的な作品世界は、他者との差異化で成り立っている。小説の書き手は、男性であり、中流階級出身者であり、高等教育経験者であり、都市生活者であった。少数でありつつ、ナショナル・アイデンティティ形成を担う一角であった彼らの表現には、当然帝国主義の論理が含まれる。作家たちは、自己を卓越化するために、「辺境」の民を始めとする他者を切り分け、見下ろし、そして一定時間の経過の後、関心を閉ざしていった。「私」という、語るに足る精神の深さを持つ存在の獲得には、自身より劣位にある比較対象の発見が不可欠であったと言える。文学者が政治家や実業家と価値観を共有せず、常に摩擦を生んだことや、彼らが体制からはみ出し、当局から言論統制をしばしば受けたことは、事実である。作家たちが、自身をみじめで無力な存在として、あるいは女性ジェンダー化した感傷的な存在として描いていったのは、ゆえなことではない。けれども、その彼らが一方では差別する側に立ち、国家権力と癒着していたことは、見逃されてはならないであろう。

ジャンルとして認知された後の「自己表象テキスト」は、確定的記述で作品世界を開示し、誕生に必要とされた初期条件を省略することができた。特定人物の私生活が詳しい説明を施さずに語られても、文学をめぐる解釈共同体が成立していれば、それは、十全な享受の対象となる。しかし、「私」は、最初から記述にふさわしい対象と見なされていたわけではなく、他者との関係性から価値が確認されていたことは疑いえない。後には不可視となる排除と抑圧との文脈を生成期の作品群に辿っていくことは、「自己表象テキスト」の暴力的な起源を解き明かす意義を帯びている。その作業の恰好の対象と考えられるのは、旅を取り扱った作品群である。

近代になって日本人は、新たに開かれた世界への好奇心をかき立てられた。もちろん、未知の地域に関する知識が求めら

れたのは、征服と支配との準備作業でもある。調査・探検と軍事行動とは一連なりのものであった。そのような状況下、旅は、帝国主義の欲望を個人レベルでなぞる行為に意味を変えていく。土地の風景を内面に再領土化するという目的は、赴く先が海外であつても、国内であつても同じである。交通網の拡充もあつて、一九〇〇年代以降、旅は娯楽として一般化する。それは、観光旅行（ツーリズム）の時代の到来であつた。藤森清は、ツーリズムの想像力が国民国家の形成に寄与した役割を重視し、旅行者の「自国土を外国人の眼で異国趣味的に眺める視線」によつて「地方色や伝統」が「創り出され再配置されてい」つたことを論じている。<sup>6</sup>「その再配置の中心は、サバービア（郊外）に生活する中産階級という想像上の零度地点である。」と、藤森は旅行者の視線を想定するが、そのような「中産階級」のイデオロギーを国民の感性として定着させていく上で、文学者が書き表したものの影響は大きかつた。

藤田叙子は、「明治二十年代から四十年代にかけて、『紀行文の時代』ともいえるような一時期が現出する。」と捉え、その時代に博文館から出版された地理書・紀行文を総覧している。<sup>8</sup>また、五井信は、「明治三〇年代」に夥しい数が発行された「ガイドブック」を精査し、それらの書物によつて、旅行者の「歴史を学び旅での観察を旅日記に記す」習慣が促され、「同時代の編著者をはじめとする他の旅人とも関係づけられ」、「われわれ」としての国民意識<sup>9</sup>が強化されていく契機となつてゐることを考証している。五井がガイドブック・地誌の編纂に関わりながら、従軍記・紀行文・小説を多産した田山花袋を例に取つて説明するように、旅に関する書物は、特定のジャンルに止まらない拡がりを見せ、文学者は、分野を横断するような形で関わつていった。日本全土は、彼らの手によつて、細やかに分けられ、土地ごとに丹念に記述される。辺境・名勝・保養地・地方都市・山村・漁村・近郊・郊外と区別された地域は、書き手の中流階級意識に沿つて序列化されていった。価値づけられた旅の記録を追体験することで、読者は想像の共同体に参加することになるが、他方、周縁に所属する者は、そこから締め出されていかざるをえない。作家たちが道中や現地で接した人々とのように関係しているか、その様相を分析することで帝国主義と「私」とを結ぶ糸が見えて来よう。

本稿では、検討材料として雑誌『太陽』を用いる。博文館から刊行されていた『太陽』は、一八九五年一月の創刊以来、平均十萬部という、有力な新聞に勝る部数を誇った総合雑誌であった。「国民知識の供給者」を自認し、「百科全書的な啓蒙主義」(鈴木貞美)を編集方針とした誌面は、例えば「時事評論」・「人物月旦」・「論説」・「読者文壇」・「文芸」・「学芸」・「雑纂」・「評論之評論」から構成され(一〇一、一九〇五年一月一日)、網羅的な情報提供が心がけられている。そのため、隣接ジャンルと小説との相関を把握することが容易である、という利点がある。また、「東京発の中央文化の受信者として全国各地に漸く形成されてきた知識人中産層とその家庭に、最大公約数的な時々刻々の社会文化知識を継続的に提供し続けた」(永嶺重敏)という受容層と雑誌の性格とは、時代の中心的なイデオロギーを押さえるのに都合がよい。とりわけ、地理に関して相当の誌面を割いていることは、国民意識の形成の観点から重要である<sup>(12)</sup>。そして、言うまでもなく、『太陽』は、自然主義文学運動の一拠点でもあった。そのような複数の言説が行き交う場所に踏み込み、ここでは「自己表象テキスト」の前史の解明を試みる。対象とする期間は、一九〇五年から一九〇九年までの五年間である。

## 二、横領される風景

技術の確かさを求められていた職人から自己の欲求に誠実な創造者へ——、芸術に携わる人間のイメージが一九一〇年代に交代することは、よく知られている。大正教養主義の影響と普通説明されるこの変化は、芸術家の階級上昇を主たる理由とするものであった。新しく担い手の中心となったのは、高等教育経験者である。芸術家の自意識の変容を確認するため、小川煙村『悪人』(二二七、一九〇六年五月一日)という無名の小説を取り上げてみたい。

主人公は、日暮里に住む彫刻家天野鉄之助である。彼は、「相当な腕を持ちながら世に容れられ」ない不遇にある。「高い気位を持ち世間に諂<sup>こ</sup>びず、技術なども瑣<sup>さ</sup>細な末端をかまはずに思ふ所を直截に現はすから、刀は生硬といはれ、想は頑なり

と冷評<sup>けな</sup>された」と説明されるように、信念に即した仕事は一般の支持を得られず、次第に彼は、「世間」を呪詛するようになる。意趣返しに「妬みの髑髏」の制作を思い立った天野は、標本を得ようと谷中の墓地に赴く（以上「第二」）。そこで彼は、田宮与次郎という男がその兄と密談しているところに出くわした。そこでは、「世間」の仕打ちゆえに泥棒になった兄に善良な与次郎が更生を求めていたのであるが、目的を果たした天野は、後日新聞で骨盗みの犯人として与次郎が誤認逮捕されたことを知って悩む。残された与次郎の病弱な妻や幼い子どもに接した彼は、心の痛みに堪えかね、自首を決意する。

地の文における主人公のモノローグの処理にいくらか新味が感じられるものの、『悪人』は、所詮大時代な作品でしかない。しかし、この短編が、「芸術か、人道か」という岐路に主人公を立てていることは無視できない。「彼れは凡々たる人間、我れは彼れより勝れたる技能を持つ者」（「第六」）は、与次郎（無職であり、兄から盗んだ金を与えられていることから分かるように、生活は苦しい）と自身とが異質の存在であるという天野の認識をあからさまに表すものである。「貧乏な彫刻家」（「第二」）であるにもかかわらず、経済状況の等しい人間を対等に見ない天野に、職人としての意識はうかがえない。『悪人』は、本来交わるはずのない二人を、「世間」から疎外されている者という共通項で括り、墓場での遭遇という偶然によって、強引に結びつける。「此日、市中には鈴<sup>りん</sup>の音<sup>おと</sup>勇ましく、気おひの声が八百八町を駆廻<sup>くわ</sup>つてゐる。／『大勝利号外、日本大勝利号外』（「第七」）は、作品の掉尾であり、天野のヒューマニスティックな決意を言祝ぐように、日露戦争の勝利の報が全市を覆う。国民意識を読者に喚起するかのような結末は、しかし唐突であり、かえって天野と与次郎の関係の希薄さと物語の不自然さとを際だたせるものであろう。テキストは、芸術家が庶民から隔たり、両者の間にドラマが起きにくくなっている状況を反映している。

芸術家である自認は、武者小路実篤や谷崎潤一郎によってエリート意識と結び付けられるが、上の世代においても自己卓越化の傾向は兆していた。その意識は、自己の所属する場所とそれ以外の世界とを切り分ける。旅を行い、訪れた土地の特色を筆録した書き手の目には、当然対象への優越感が含まれていよう。紀行文家として著名な遅塚麗水（一八六六年生まれ）

や硯友社の系譜を継ぐ江見水蔭（一八六九年生まれ）、あるいは児童文学者巖谷小波（一八七〇年生まれ）といった、経歴や思想を別にする者たちの文章が、等しく現地の人間に無関心であることは、興味深い。知人二人と箱根へ梅見に出掛けた時のことを綴った麗水の「雪の乙女峠」（二一―五、一九〇五年四月一日）は、次のような文体を持つ。

蕩々<sup>とうとう</sup>茫々<sup>ぼうぼう</sup>たる富士の裾野、右は足柄山の陰より起り、左、愛鷹山の背後<sup>うしろ</sup>に亘<sup>わた</sup>りて、打ち豁<sup>ひら</sup>けたる荒原の、春は早くも浅く音<sup>おと</sup>づれて、近きは有無を疑ふ地毛<sup>ちもう</sup>の翠<sup>みどり</sup>、癒<sup>い</sup>よ遠くして碧<sup>みどり</sup>。濃く、風煙<sup>ふうえん</sup>縹渺<sup>べうめう</sup>として中に依稀<sup>うち</sup>たる山林水廓を籠めたるは、若し峯頭<sup>ほうとう</sup>に高吟せば、当に山下の人を驚かすなるべしと思はるゝなり、富士は那邊<sup>いづく</sup>と眺望<sup>へいぼう</sup>すれば、密雲裾野<sup>みくもすの</sup>の半<sup>なみ</sup>を吞みて、玉玲瓏<sup>がくれん</sup>たる岳蓮<sup>がくれん</sup>を掩ひ隠せり、（二七）

漢文訓読調の美文自体は、この時期珍しいものではない。その麗水を参照するのは、彼が道中で出会う「車夫」・「馬丁」・茶店の「媼<sup>おきな</sup>」らを点景として処理しているからである。例えば麗水は、国府津で電車を待つ間、「一老夫の車に踞<sup>きよ</sup>して睡<sup>ねむ</sup>るあり、電車よりも人力車こそ面白<sup>おもしろ</sup>けれと喚<sup>よ</sup>び起して、先づ春山（引用者注——同行の友人）を載せて走らせ、車に逢はゞ憊<sup>やど</sup>ふて余<sup>われ</sup>を迎<sup>むか</sup>えしめよと吩咐<sup>ふんぷ</sup>したり」（二二）とあるように、人力車を雇っているが、車夫との応答は再現されず、注文だけが記されている。言葉が交わされるのは、友人の間だけであり、現地の人間が固有名を持つて登場することはない。富士の風景を所有するのは、旅行者だけであり、地元民は外されている。平戸に姉を訪ねる旅での見聞を俳句に詠んでいく巖谷小波の「平戸紀行」（二一―一六、一九〇五年二月一日）は、言文一致体で書かれ、門司での「日清媾和談判の記念室」や太宰府八幡宮の「日露戦役の戦利品」陳列の見学が含まれるなど、麗水とは相当趣が異なる文章である。戦争に関わる情報を積極的に集める小波は、しかし、「女中」・「車夫」・「按摩」・「船頭」には無関心であり、旅の付属物としてしか扱っていない。工学士の紹介で製鉄所を一覧したり、俳人仲間と区会を催したりしたことが挿話となつてゐるのに比べ、それらの人々は背景とし



て描かれるに止まる。車夫と気分を共有することを想定しているとは考えにくい「松の香や車上に秋の風ぬるし」という句は、象徴的である。小波は、武雄温泉について、「何も見るべき物は無く、温泉と云へば直ちに宮の下塔の沢を連想する、我々東京人士には、何うも十分の感興が起つてくれない」と不満を漏らし、佐世保の「通船の乗場の、頗る野蛮的なる」のに驚いている。その発言は、都市生活者たる自己を基準にした恣意的なものである。

芸術家としての誇りと旅行者の奢りとは、同じものではない。それらを軽々しく直結させることは慎むべきであるが、美意識が生まれる場や条件にまで考えを巡らせた場合、両者は、それほど隔たっているわけでもない。そこで参考となるのは、江見水蔭「蛮勇と風流——（貝塚の発掘——利根の舟遊——）」（二一—一三、一九〇五年一〇月一日）である。副題にうかがえるように、これは、利根川流域を周遊した報告であるが、水蔭が発掘作業と舟遊びとを並置しているのが目を惹く。考古学に関心の深かった彼は、行く先々で貝塚を訪れ、土器を採取していた。同時に彼は、月夜に舟を浮かべて、茶を楽しむ趣味も持っている。「今宵の風流、翌日の蛮勇」と対比されている二つの行動を同時に引き受けるのは、水蔭の個性かもしれない。しかし、彼の振る舞いは、「風流」と「蛮勇」とが一方的な収集行為という点で共通することを図らずも告げている。

既にして水田の間に<sup>い</sup>入り、街道を行くに、向ふより一人の男の、旧曆の盂蘭盆会とて、紙製の蓮華を手<sup>さ</sup>に提<sup>きた</sup>げ来るとすれ違ひぬ。此方の三人は急に顔色を変へたり。我も無意識の裡に寒氣立ちたるを覚えれば、何者にやと玄子（引用者注——現地小見川における水蔭の知人）に問ひしに、声を潜めて、近郷に誰知らぬ者なし。強盗三犯の何某<sup>なにかし</sup>と説明しぬ。

強盗三犯——盆会——蓮華——平和の境——好詩材なりと我は打笑みたり。

田園と犯罪との落差に興味を感じ取られているが、それはあくまで生活圏を離れた水蔭によつて眺められた風景によるもの

である。貝塚から掘り出された土器と共に、その記憶は、東京に持ち帰られている。この「風流」な行為が表現として問題なのは、土地に向けられる視線が暴力を孕んでいるからである。

そのことは、「宿婢分布図——（旅日記の一節）」（一四—二、一九〇八年二月一日）を読む時、より鮮明となる。「奮勇と風流」とも連なるこの随想で、水蔭は、「諸君」に対して「妙な研究」の成果を披露しようと語り出す。それは、「先住民遺跡の分布図を作る為の旅行」の「副産物」としての「現存の某人種の分布図」、すなわち「宿婢（水蔭は、「しやくふ」ともルビを振っている）」の「分布図」である（以上「一」）。佐原や山田の旅館で働く女性の境遇が不安定なことで共通することに気づいた水蔭は、彼女たちに話を聞き、深く同情する。彼が思い描く「宿婢」の生涯は、客に身請けをされるがやがて捨てられ、再び仕事に戻るも、性病を悪化させて亡くなる、というものである。「同じ人が同じ事をして同じ処をぐるぐると廻つて居る様に考へた水蔭は、「慄然」とする（「七」）。けれども、「宿婢」は、彼が「詩趣」（「二」）を受け取る景色以上の存在ではない。貝塚から出土した人骨に梅毒の痕跡があつたことを挙げ、「三千年前にも、矢張宿婢が居たらうか。それは別問題だが宿婢の如き運命は必ず有つたに相違なからう」と一文を締め括る彼にとって、彼女たちは無縁の人であり、「先住民」と同様に遠ざけられている（「七」）。「分布図」に載せられるのは、基本的には物であり、水蔭の見立ては、征服のために「地図」を作成した帝国主義国家の模倣とすることができよう。近代における「風流」のありようを大きく規定するものは、旅行者と現地民との非対称な関係である。それゆえに風景は、たやすく訪問者によって奪われ、自由に感情を貼り付けることのできる素材となる。

「私」の精神が深さを獲得するためには、私有化可能な風景が不可欠であつた。田岡嶺雲「波のしふき」（二二—一〇、一九〇六年七月一日）は、その事情を如実に示す一例である。病のため中国から戻り、長崎の小浜温泉で静養していた彼は、海を眺めつつ、半生を振り返る。「嗚呼『海』よ爾、何の深き深き恨みに爾の胸は漲りて其吐く息吸息の永久には噴れる人類の栖処なる大地と何の讐かありて、朝々暮々に其憤怒の叫喚突貫の呐喊凄まじく、石を蝕み巖を噛み、陸土を其基より震ひ

動かして是を其底ひ無き青溟に吞み去らんとは犇めくぞ」(一一)という呼びかけが示すとおり、文体は硬い漢文訓読調である。嶺雲は、「活動」・「自由」・「革命」の象徴である海に、長く闘病生活を続け、著述が思うように進まない「吾」を対置する(一二)。「吾」は、飢餓や貧困に苦しむ「同胞」・「人類」(一六)に貢献できないことを嘆き、全編にわたって否定的な自画像を提示していく。社会主義者である嶺雲の内省は真摯であるものの、観念的に過ぎ、大正教養主義の言説に近いところがある。この文章における海は、読者にとつては何ら固有の表情を持つものではない。けれども、書き手には、都会から離れた温泉地という場が決定的に重要であつたろう。卑小な自己を表現するためには広大な海が対立物として必要であり、それと向きあわずに、叙述を始めるのは不可能である。また、その海は、他者に帰属するものであつてはならない。「波のしふき」には登場人物がなく、無人の海で「吾」は、「石工」や「農夫」の境遇を羨みながら(四)、文字を知ったがゆえの憂悶を吐露するのである。同様の海の形象は、清見瀉に臨み、亡くなった恩師外山正一と友人高山樗牛を偲ぶ姉崎嘲風「我が日記の一節——卅八年三月末日」(二一八、一九〇六年六月一日)や情熱的だった過去と無為の現在との落差に苛立つ「自分」の心情表明である小川未明「日本海」(二二一四、一九〇六年一月一日)においても観察できる。

旅をする文学者によつて、風景が横領され、「私」に奥行きが与えられること——それは、「自己表象テキスト」成立の基盤の一つである。言文一致体への移行を目印とした場合、この時期の文学者には世代対立が顕著であるが、中流階級としての感性や価値観は受け継がれ、さらに洗練されているところがある。所属する階級や領域が違ふ者に冷淡であり、抑圧的であるという点で、作家たちは共犯関係にある。

### 三、観光地とホモソーシャルな絆

『太陽』に掲載されている旅行記は、日本国内だけでなく、中村春雨「倫敦日記」(二五一二、一九〇九年二月一日)のよ

うに外国を対象としたものも含まれる。ただ、その多くは、出来事の記述に紙幅を費やし、内面が書き込まれていることは珍しい。異文化・異言語との接触は、緊張を与え、我が身を省みる余裕を与えない。旅行者は、日々の見聞によつて得られる新奇の情報を整理することに追われる。周縁に位置づけられる地域を訪れた場合も、事情は似通う。

向嶋逸人「療痾地としての八丈島」(二一一一二、一九〇五年九月一日)、久山龍峯「満韓紀行」(二二一五、一九〇六年四月一日)、江見水蔭「蔚山行」(二二一一〇、一九〇六年七月一日)、田山花袋『アリユウシヤ』(二二一一六、一九〇六年二月一日)、遅塚麗水「音更古潭オトツブケコタンの一夜」(二四一二、一九〇八年二月一日)、村田懋磨「西間島事情」(二五一四、一九〇九年三月一日)など、この時期の誌面には、「辺境」の紹介や探訪記が数多く見られる。書き手たちは、各自の切り口で現地に否定的な評価を下していく。それは例えば、「長き烟管をもて嗅き烟草を燻らし、唾を吐き、手漬をかみ、不潔至らざるなき韓人」(「満韓紀行」)や「その(引用者注——一行が立ち寄った酒家を指す)不潔さ加減と云つたら、逆とても形容が出来ぬのである。」(「蔚山行」)「二」のように衛生の観点から貶めることであり、「依頼多き人種」、「忘恩の民」(「療痾地としての八丈島」)と劣等の烙印を押すことである。アイヌの長の家を訪れ、対座した時の印象を「主客の座既に定まりて、暫時しばしは黙然として沈々たる夜に坐す、太静太寂、太古の世も斯くやとばかり」(「音更古潭オトツブケコタンの一夜」)「六」、あるいは「樺太あちらでは総て自然の儘、太古の儘、人工の加はつて居るものとは殆ど無いと謂つても好い」(『アリユウシヤ』)「二」といにしえの時代を形容に用いることも、文明—野蛮の序列化に加担するレトリックと言えよう。<sup>(14)</sup>

一方で彼らは、そこが自国の領土であることを確認することも怠らない。加藤清正の籠城跡への立ち寄り(「蔚山行」)、『椿説弓張月』の舞台であることの紹介(「療痾地としての八丈島」)、「中央政府からの視察員」という使命の想起(『アリユウシヤ』)「二」などによつて、書き手は、「日本」との関連づけを心がける。しかし、そのような努力は、基本的には実を結んでいない。あまりにも「日本」と隔たった自然や言葉、習慣が、筆者の感情の投影を拒むからである。「余は全く不思議の里に迷入つて、思ふ儘の事を見聞きして来たのだ」(「蔚山行」)「七」、「自分はふと西洋の古名画を思ひ出した(引用者注——

少女「アリユウシヤ」に「自分」が初めて逢った時の印象」（『アリユウシヤ』「三」）といったロマンチズムの看取によって土地との結びつきを調整しようとする彼らは、「辺境」の馴致に失敗していると解することができる。そこでは対象について過度の感傷が語られることはあつても、筆者の内面が詳細に叙述されることはない<sup>(5)</sup>。

前節で検討した「波のしふき」の舞台は、長崎の小浜温泉であつた。そこは、「吾」に「ヤレ大磯の、逗子の、箱根の、黄金と爵位が幅をとる都近くの遊散場<sup>ゆうさんば</sup>に、こんな趣き、こんな景色、こんな閑寂<sup>しづけ</sup>さ、舒暢<sup>のんき</sup>さが求めたりとも獲らるべきや」（「十二」）のように好印象を与え、称賛される場所である。嶺雲は、さらに、着飾った女性たちが当地においても見受けられることをやや皮肉に捉えて、「天さがる鄙とはいへど、此地も王土なり」、「吁、光荣ある戦捷国」（「十三」）という感想も書き残している。彼は、落ち着いた環境を求めて都を離れても、海外に出ることはない。また、「辺境」にも赴くことはなく、滞在先には温泉が選ばれている。嶺雲の判断からは、ナシヨナリズムと階級意識との微妙な均衡がうかがえよう。全員が「人間を極めてセゝコマしく解釈する病氣」に罹り、「激烈なる生存競争」が繰り広げられる「東京」（江見水蔭『虹の松原』「一二」一二、一九〇六年九月一日）「前編／三」、「高貴なる思念もなく唯臥<sup>ふ</sup>て起て喰つてゐる豚の如き生活の、都会」（児玉花外『鰯雲』「二五―六、一九〇九年五月一日」）、「忙<sup>せは</sup>しない人の動めきに充ちた都会の空氣」（相馬御風『漂泊』「二五―一、一九〇九年八月一日」）と表されている、心労をもたらす都会から一時的に逃れたい願望があり、一方では未知の場所を探す煩雑さを回避しようとする抑制が働く。その結果、中心と周縁とを除く国土で、観光地が残ることになる。文学者は、すでに知られ、宿泊施設が整った場所を目指し、そこが「日本」であることに安心を得て、海や山を散策した。知名度の差はあるにしても、眺められる自然は、元々人々に親しまれていたものである。国家権力と通俗的な美意識とが準備した風景を、作家たちは占有し、そして内面を作り出していった。そこで生成された「私」が場の制約を受けた存在であることは、言うまでもない。観光地から恩恵を受けている側の人間として、文学者は、それを支えている帝国主義体制の維持に協力することになる。

作家たちは、「辺境」に対してと同じ方法で、社会的弱者、貧困層、労働者階級を捉えていった。<sup>16</sup> 差別されている存在にさまざまな劣等の徴憑が言葉で与えられていき、民衆の分断は強化される。書き手は、時にロマンチズムやヒューマニズムを文章ににじませる。しかし、そのような気分は、見る者と見られる者との隔たりが解消されない限り、統治の補完物ではない。彼らの仕事は、中流階級の身分観を代弁するものであり、『太陽』の編集方針にも適うものであった。SY生「四谷鮫ヶ橋貧民窟の生活」(二三―一二、一九〇七年九月一日)以後、『雑纂』欄では、匿名もしくは無署名で「人力車夫の生活」(二三―一三、一〇月一日)、『新聞記者の生活』(二三―一四、十一月一日)、『相撲取の生活』(一四―一、一九〇八年一月一日)、『下等俳優の生活』(一四―二、二月一日)といった特定職業の紹介が掲載されている。<sup>17</sup> 情報として貴重なものを含むこれらの記事は、好奇心に縁取られており、本稿で取り上げてきた作家の筆致に通じるところがある。郊外生活に転じていく中流階級にとつて、低所得者層は次第に生活圏から離れた存在になっていく。そのことと対応するように、旅においても、訪問者と地元民との関係は希薄化していった。<sup>18</sup> 他者の排除によつて、旅行者は、ひとまずは快適な時空間を手に入れることができる。しかし、異質な者との出会いを斥けることは、ドラマの可能性の芽を摘み取ることであった。観光地をめぐる小説は、次第に変容を余儀なくされる。

『不如帰』・『金色夜叉』の時代、貴族や富裕層にのみ許されていた避暑や保養を目的とする旅は、徐々に大衆化していく。けれども、『虹の松原』のように、現地で男女が出会う設定が取られている作品は少数である。水野葉舟『さあちゃんと安井』(一四―一、一九〇八年一月一日)では、鎌倉の音楽講習会で「私」が牧師の娘と知り合うが、その後の手紙のやり取りが不調で、進展がない。薄田斬雲『濛氣』(二二―一六、一九〇六年二月一日)は、函館から網走への汽船で乗り合わせた女性を介抱し、さらに同じ旅館に泊まりながら、手を出すことができなかった男の話である。<sup>19</sup> 浪の人『函根日記』――……年六月下旬』(二三―一〇・一一、一九〇七年七月一日・八月一日)は、ハンセン氏病の血統の噂から結婚を反対された若い男女が心中する事件を織り込んでいるが、中心は、放浪生活を続ける「自分」の孤独な心境の提示にある。<sup>20</sup> 情死の物語よりも

「青年の煩悶」という新しい主題を選ぼうとする作品の志向は、見逃せない。

旅先は、内省をする場として役割を改めることになる。小川未明『荒磯辺』（二一—一六、一九〇五年二月一日）は、過渡期にあつて新旧の要素を混在させている短編である。語り手の「自分」は、新潟の郷津温泉に滞在している。プロフィールは不明であるが、海辺で詩集を繙く姿からは、文学者らしい雰囲気伝わつて来る。「自分」がこの地を訪れたのは、「煩悶」（一）から逃れ、気を紛らわすためである。しかし、夜ごとの「空想」（七）は、「自分」を悩ませ続け、落ち着く機会を与えない。「自分」は、静代という婚約者を持ちながら、二年前に北陸の温泉場で出会った佐美子という既婚者への恋情を断ち切れず、婚約を解消しようとして、静代や自身の両親と衝突した。「自分」の旅は、冷却期間を置くためでもあろうが、佐美子への未練はなかなか治まらない。三角関係を一見扱っているかのような『荒磯辺』であるが、佐美子と「自分」との繋がりは、「しかし考へて見れば三度と遇はぬ知己で、語ることも音楽や、芸術に関したことのみである。（二）」との反省が示すように、顔見知り程度のものである。この短編は、温泉場での出会いの不成立の記憶を、主人公がもう一つの温泉場で反芻する作品として理解するのが適当であろう。実際、本作で印象づけられるのは、主観的な日本海の記述であり、語り手の感傷である。そこで、海と「自分」とが周囲から切り離され、女性ジェンダー化されているのは、注目に値する。海については、「自分は海は、やはり女性であると思ふ。殊に夕暮の雲、夕陽を浸し、真紅に燃える海波の景色は、恋の熱き血潮に漲る青春の美女であらう。（二）」というあからさまな表明がある。一方「自分」の女性性は、「港の入江に帰る舟には、暗と戦つて来た勇士を乗せてゐる。女房や子供等は満腔の熱き涙と喜悦と……彼等の愛は健全であるし、彼等の生涯は男らしいと感じた。（四）」のように、漁民との対比で暗示される。また、『荒磯辺』には、駅での出征兵士の見送りを目撃する場面がある。「自分」は、「悲壯の感慨に打たれ」と共に、「大日本万歳」と叫び、汽車を追いかける「里の子供等」の姿に「粗野なる、雄偉なる、一種の或る力」を感じている（六）。日露戦争が進行中であることを端的に表すこの挿話は、戦争に関わっていない主人公の後ろめたさゆえに、テクストに象嵌されているのかもしれない。ただし、これらの人々は、「異境万里

の空にある気持」を抱いている「自分」にとって、あくまで無縁である。「自分」は、「悲哀」(「五」)の感情世界に自足し、そこから出て行こうとはしない。終盤静代が「自分」の下に駆けつけようとしていることが告げられるが、二人が対面を果たす前に作品は閉じられる。

人の気配がなかった「私」の滞在地からは、さらに女性が排除される。そこに立ち入ることを許されるのは、同じ階級、同じ嗜好を持った男性だけである。旅は、ホモソーシャルな関係性<sup>(2)</sup>を作り、その絆を確かめる機会として、新たな意味を帯びていく。島崎藤村『旅』(一五―五、一九〇九年四月一日)は、男同士の連帯感を強化する物語として読まれる必要がある。う。「K君三十九、A君三十五、M君三十、私は三十八だ」という「吾儕<sup>われわれ</sup>」四人の一行は、「都会の空気」から離れるため、伊豆半島の周遊を行う。修善寺——湯ヶ島——下田——伊東を巡る旅は、土産物や絵葉書に行く先々で購入していることが表すように、観光そのものである。各地は通過点として、慌ただしく見物され、「土地<sup>ちやうしよ</sup>の長処<sup>ちやうしよ</sup>を見つけて、その日／＼の旅の苦痛を楽みたい」と願う「吾儕」に消費されていく。例えば、湯ヶ島の温泉での体験は、次のように記されている。

夕方から村の人は温泉へ集まった。この人達はたゞで入りに来るといふ。夕飯前に吾儕が温まりに行くと、湯槽<sup>まはり</sup>の周囲には大人や子供が居て、多少吾儕に遠慮する気味だつた。吾儕は寧ろ斯の山家の人達と一緒に入浴するのを楽んだ。不相変<sup>あひかはらず</sup>、湯は温<sup>ぬる</sup>かつた。容易に出ることが出来なかつた。吾儕の眼には種々<sup>いろいろ</sup>なものが映つた。——激しく労働する手、荒い茶色の髪、僅かにふくらんだばかりの処女<sup>をとめ</sup>らしい乳房、腫物の出来た痛さうな男の口唇<sup>くちびる</sup>……

同じ湯に浸かりながら、「吾儕」と村人とが断絶していることは容易に理解されよう。「吾儕」は、感興のために一方的な視線を投げかけている。作品中で「吾儕」という自称は、安定して使用されており、意見の食い違いが起こることなどはない。宿の部屋では、「東京に居る人のことや、未だ互に若かつた時のことや、亡くなつた友達のことなど」が語り合われ、親密感



が高められている。旅の最終日、「楽しい疲労」を感じながら、「吾儕」の意識は、都会の騒音と「単調な、退屈な」日常生活に向かい出す。『旅』は、ホモソーシャルな関係性が都市と観光地との相互依存、ひいては生産と消費との循環を維持するための装置であることが、明白に現れている作品である。「漂泊思想家の一人」であり、都会で「憂愁の日」を送る「僕」が「海辺の小村」に止まり続ける友人の「君」に呼びかける書簡体小説である花外の『罌雲』で、「都門へ再び還り来たまへ！」と「僕」が「君」の帰京を願っているのも、一つの参考となろう。

相馬御風『夢みる人』（一三一八、一九〇七年六月一日）や正宗白鳥『空想家』（一三一―一三、一九〇七年一〇月一日）など、ホモソーシャルな関係を扱う小説は、この時期から目立つようになる。それらの作品が奥行きのある内面を備えた「私」を描き、「自己表象テキスト」の源泉となっていることは間違いない。国家のために有意義の人となることを拒否し、芸術に親しみ、哲学的な議論を繰り広げる人物像が、現状に対する文学者の批判から生まれたものであるという見方は、むしろ有効である。ただし、そこで描かれている「私」の深さが他者の抑圧と風景の横領とによって獲得されたものであることにも留意が必要であろう。御風や白鳥の作品では寄宿舎や下宿といった閉じた空間が主舞台のため、外部との関係が不透明である。とは言え、主人公が無垢であるわけではない。観光地から生まれた「私」は、本来的に凡庸であり、階級的な存在である。

#### 四、花袋が取り落としたもの

今一度確認しておけば、『太陽』の読者の中心は、中流階級であった。労働者階級が読むことを、作り手は、ほとんど想定していないように見える。小説に限っても、差別的な言辞は、枚挙に暇がない。「粗暴な下等人種とは謂へ、何と云ふ無礼だらう（引用者注）——車夫に対する主人公「先生」の感情」（小栗風葉『氣持』（二二―一、一九〇六年一月一日）、「あん

な下劣極まることばかりを連想してゐる動物等（引用者注——雑誌に興じる職工に対する主人公吉本定蔵の感情）（岩野泡鳴『日の出前』（二四一五、一九〇八年四月一日）、「諏訪町と云へば近來メツキリ寂れた日陰町ひかげちやうである。住むものは大抵砲兵工廠の職工連ばかり、少し間通り日当りを吟味する人ママたちは、工場の汽笛に煤煙に蒸氣の地響に恐れをなして滅多に居付かない」（真山青果『男性』（同前））など、作家だけが強い偏見を持つてゐる訳ではないだけに、事態は深刻である。『日の出前』の主人公は、恋愛に苦しんで教会を離れ、種々の不安に神経を疲労させてゐる。その彼が職工への侮蔑を隠さないことは、「自己表象テキスト」の構造を透視するのに、示唆を与えよう。「私」を人間たらしめてゐるのは、「下等人種」・「動物」と蔑まれてゐる多数の存在である。

田山花袋は、抑圧に積極的に関わつた文学者であると言えるであらう。「一」で述べたように、花袋は地理書の編者、紀行文の書き手として、日本の領土の拡大や地域の分割を側面から援助してきたからである。そのことに伴い、花袋の表現態度は、徐々に変わつていく。「若狭道」（一一一三、一九〇五年一〇月一日）で道中に会合う人々と隔てなく付き合つていた花袋は、寂れた宿場町に情緒を感じ、船頭の生活に「人生」を発見したり（「古駅」（一二一四、一九〇六年三月一日））、辺境の地でロシア人少女をロマンチズムで捉えようとしたり（「アリユウシヤ」）するようになる。彼はまた、「清らなる詩人的生活を送ることが出来ると思」（「郊外」（一一一六、一九〇五年二月一日））、郊外への移住を希望する。事実、一九〇六年一二月に花袋は、東京市外代々木山谷一三二に家を新築し、転居を果たすのであるが、これらは、下の階級に属する者から遠ざかつていくことを意味してゐた。一九〇七年、花袋は、『少女病』（一三一六、五月一日）、『蒲団』（『新小説』一二一九、九月一日）を続けて発表し、自然主義の作家としての地位を不動のものとする。女学生を窺視する杉田古城や女性22の弟子に欲望を抱く竹中時雄の描出に文壇は驚き、後者には「肉の人、赤裸々の人間の大胆なる懺悔録」（星月夜〔島村抱月〕）という評語が寄せられる。そのことを以て『蒲団』が「自己表象テキスト」であると判断するのは早計であり、むしろ誤りに近いが、文学者の否定的な形象において新しいものを持つていたとは言えるであらう。ただ、時雄の醜態が、自己対

象化の所産としてどれだけの効力を持ちえたかも考察されなければならない。例えば彼は、「ある書籍会社の囑託」として「地理書の編輯の手伝」をしている（二一）。小石川にある「工場の一つ、西洋風の二階の一室」が時雄の仕事場である。彼は、毎日「輪転機械の屋に據す音と職工の臭い汗との交つた細い間を通」り、そこに上がっていく訳であるが、それ以後、職工が姿を現すことはない。それと対応するように、芳子の残した蒲団に時雄が顔を埋めて泣く有名なラストシーンも二階で行われる。比喩的に言えば『蒲団』は二階で始まり、二階で終わる物語である。一階には、時雄に意識されず、さらに語り手（ひいては作者）が見落としている領域が存在する。

初期の『太陽』に掲載された小説作品の一つに、斉藤緑雨『あま蛙』<sup>(25)</sup>（二一二、一八九六年一月二〇日）があり、緑雨らしい皮肉な態度で主人公の小説家荒子落雁が相対化されている。落雁は、隣の令嬢、芸者、吉原の遊女に次々と懸想するも、ことごとく不首尾に終わる。西欧思想にかぶれた者への反発からか、落雁は徹底的に戯画化されているが、「特に文学者に限つて霞を喰ひ霧を吸つて立つにはあらず。」は正論であろう。主人公の独りよがりな恋愛が相手の女性の立場から浮き彫りにされている点も、風刺を表面的に終わらせない配慮として素晴らしい。一一年後の花袋からは、緑雨のように他者の目で文学者を捉える発想が欠けてしまっている。そのため否定的自画像は、アイロニカルな自己肯定への反転を容易に赦すことになる。権力との衝突の局面で反復される弱点は、「自己表象テキスト」の誕生時にすでに刻印されていたものであった。そして、その弱点は、現在も克服されてはいない。「私」の自意識は、いよいよ屈折を深め、内向きの視線は、新自由主義の暴力を黙認している。文学者の自画像に親身に寄り添うことは、政治性を回避する身振りを反復することにほかならない。論ずる者の最小限の倫理として、それは避けられるべきであろう。「自己表象テキスト」の起源と展開とを追う際、手放されてならないのは、一階への、すなわち「私」の外部への想像力である。

注

- (1) 日比嘉高『自己表象』の文学史——自分を書く小説の登場（翰林書房、二〇〇二年五月二五日）。日比は、「作家が自分自身を登場人物として造形した小説」を指示する語として「自己表象テクスト」という名称を提案する。「私小説」をめぐる議論が恣意的な概念規定を過去に当てはめていったことの反省や、同時代のさまざまな文化現象との交渉から作品群が生成する過程を追いやす利点がある（二〇〇一ページ）。メディア状況や読書慣習の変化、青年論・人生論の推移、絵画界の動向などを検証して、「自己表象テクスト」が現れ、認知されていく複合的な要因を明らかにした日比の仕事は、文学史の枠組みの見直しとして参考になる。本稿では、「自己表象テクスト」の語を利用しながら、「私」を語ることに於ける排除の力学や階級性を可視化することを試みる。
- (2) レーニン、宇高基輔訳『帝国主義』（岩波文庫、一九九一年二月五日第四三刷）「第九章 帝国主義の批判」一九六ページ。
- (3) E・W・サイード、今沢紀子訳『オリエンタリズム 上・下』（平凡社ライブラリー、一九九三年六月三〇日〔未見〕）。サイードは、「オリエンタリズムとは、オリエンタル的事物を、詮索、研究、判決、訓練、統治の対象として、教室、法廷、監獄、図鑑のなかに配置するようなオリエンタル知識のことなのである。」（上—一〇一ページ）と規定し、西洋人が自己を優位に置く志向を明確にすると共に、「オリエンタリズムの諸観念は、いわゆる西洋人、ヨーロッパ人、西洋人ばかりでなく、当のいわゆる東洋人の上にも影響力を及ぼすことになった。」（上—一〇三ページ）と述べるように、抑圧される側がオリエンタリズムの言説を受容する局面にも見落としていない（引用は、一九九五年二月二七日第四刷に拠る）。
- (4) 福岡良明『辺境に映る日本——ナショナリティの融解と再構築』（柏書房、二〇〇三年七月一五日）二九ページ。
- (5) 注(4) 福岡前掲書一五ページ—一六ページ。
- (6) 藤森清『明治三十五年・ツーリズムの想像力』（小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究』（小沢書店、一九九七年五月三〇日）所収）五七ページ。
- (7) 注(6) 藤森論文五七ページ。ただし、藤森が「郊外」を定点であるかのように扱っていることには不満が残る。一九〇〇年代、都市と辺境とを両極とする地勢図の再構成において、「郊外」は徐々に見出されていった空間であると解する方が適当ではないか。
- (8) 藤田叙子『紀行文の時代（一）——田山花袋と柳田国男』（『三田国文』第三号、一九八五年三月三〇日）。続稿の「紀行文の時代」と近代小説の生成——習作期の田山花袋を中心に（『国学院雑誌』第八七巻第七号、一九八六年七月一五日）は、旅において培われた傍観者の態度と事実重視の姿勢とが自然主義の小説の表現を準備したと指摘しており、参考になる。また、事実性を強調することで田山花袋と江見水蔭とが交叉するという、熊谷昭宏「事実」としての「奇」と「危」——江見水蔭の「実地探検」群を手がかりに——（『同志社国文学』第六三号、二〇〇五年二月二〇日）の主張も興味深い。本稿では、藤田・熊谷の論考を踏まえつつ、事実と小説とを別の角度から関連づけてみたい。
- (9) 五井信「書を持って、旅に出よう——明治三〇年代の旅と『ガイドブック』（『紀行文』）（『日本近代文学』第六三集、二〇〇〇年一〇月一五日）。五井は、また、「鉄道・（日本）・描写——田山花袋の紀行文『草枕』をめぐる」（『二松学舎大学論集』第四三三号、二〇〇〇年三月三一日）で、鉄道網の拡大と歩調を合わせるように紀行文が多産され、国土の範囲が不確定であった時期に、境界を意識させ、対象地域が日本であることを強調する役割を果たしていたという見解を示している。
- (10) 鈴木貞美『明治期『太陽』の沿革、および位置』（鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』（思文閣出版、二〇〇一年七月二八日）所収）一四ページ。
- (11) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部、一九九七年七月一六日）第三章 明治期『太陽』の受容構造——一三一ページ。
- (12) 五井信は、「表象される（日本）——雑誌『太陽』の「地理」欄1885-1893」（金子明雄・高橋修・吉田司雄編『ディスカールの帝国——明治三〇年代の文化研究』新曜社、二〇〇〇年四月二〇日）所収において、初期『太陽』における「地理」欄を調査し、「（日本）の境界／輪郭に位置する台湾や沖縄、八丈島や小笠原などはつねに（日本）との差異が強調され」、「（日本）の仮想の中心だけをより強固にする作用」が働いていると特徴づけている（二五四ページ）。

(13) 五井信は、注(9)前掲の「鉄道・(日本)・描写——田山花袋の紀行文『草枕』をめぐって」で、『草枕』所収の「鳥羽より大阪」(八八、一九〇二年六月五日)における海と陸との闘争という比喩的な描写が、当時「陸」は「日本」と、「海」はロシア、ドイツをはじめとする西欧列強というように置きかえられ、読者には読まれたに違いない。」と推定している。かつて海軍士官を志望し、「魯西亜」を「東洋の平和を障害する国」と敵視していた「自分」が捉える陸や海にも、五井の指摘に当てはまるものがある。ただし、「日本海」の場合、その関係が成り立つのは、「自分」の過去においてである。日露戦争が終結し、軍人になりそびれた「自分」にとって、陸のイメージは、生気のないものに変わっている。

(14) 福岡良明は、注(4)前掲書「第二章『地方』という差異の発見と統合の論理——方言学」の中で、辺境の日本語に古層が残っているという柳田国男の「方言圏論」の議論を批判的に言及し、「中心との空間的な距離」を「時系列に再構成」する作用が国家権力の編成と同調することを指摘する(九一ページ)。「麗水や花袋の表現意識は、柳田の発想と質的に重なるものである。『アリユウシヤ』に関しては、五井信「柳田国男／田山花袋と『樺太』——花袋の『アリユウシヤ』『マウカ』をめぐって」(『日本近代文学』第五八集、一九九八年五月一日)が詳細な検討を加えており、「内地」とは異なる樺太の自然の特異性を語り、またそれによりロシア人・アイヌの排除を表象する」テクストの志向性を抽出している。

(15) 「辺境」における風景と内面との関係を捉える上で、注目されるテクストとして、江見水蔭『虹の松原』(二二—二二、一九〇六年九月一日)がある。唐津の海浜院で知り合った医師田代秀一と教育者落合瀧子とは、結婚して、朝鮮に渡った。秀一は、現地で病院を経営して成功する。二部構成のこの作品は、後編で一〇年後、来し方を振り返る二人を描いている。田代夫婦が感慨に耽ることができたのは、彼らの家が「松原越しに海を抱えて居る」場所にあつて、出合いの記憶を刺激するからであり、「此方の田も畑も、大概我々の所有であるし、それから此方の海の、あの船も、大概自分の物」とあるように、周囲が自分の領域になっているからである(後編／二)。既視感をもたらした、私有されている風景によって、二人の追憶は支えられている。

(16) 例えば、千葉県東葛飾郡の未整備道路を利用する病者や貧者をきわめて差別的に評する江見水蔭『悪道路』(二二—二二、一九〇七年九月一日)や草津温泉のハンセン病患者収容施設の焼失を感傷的に紹介する児玉花外『焼かれたる癩病町』(同前)などが挙げられる。

(17) 以後は、表題から次第に「生活」が取れていき、「難人形に關係の商工」(二四—四、一九〇八年三月一日)、「花見茶屋の生活」(二四—五、四月一日)、「車掌と運転手」(二四—六、五月一日)、「金魚屋」(二四—八、六月一日)、「水屋の話」(二四—一、八月一日)、「大工と左官」(二四—二、九月一日)と続いている。

(18) 鉄道の普及によって、国内旅行の場合、移動中に人力車や馬を使い、休憩所を利用する機会が激減したことも影響している。

(19) 夏目漱石『三四郎』の冒頭の挿話を想起させるが、発表は、『濛気』の方が早い。

(20) ハンセン氏は、伝染病であり、しかも感染力はきわめて弱い。遺伝説は、当時の偏見がもたらした妄説である。作品においても、「癩病といふものは伝染するもので、血統などに關係はない」と正しい記述がなされている。

(21) 「ホモソーシャル」については、イヴ・K・セジウィック、上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(名古屋大学出版会、二〇〇一年二月二〇日)参照。セジウィックは、「同性間の社会的絆」を表す「ホモソーシャル」という概念をセクシュアリティに関わる無意識の政治を論じるために駆使し、「男性支配社会では、同性の(同性愛を含む)ホモソーシャルな欲望と家父長制の力を維持・譲渡する構造との間に、常に特殊な關係が——潜在的に力をもちうる、独特の共生關係が——存在する」(三八ページ)ことを、イギリスの近代小説の分析を通じて主張している。

(22) 相馬庸郎編『年譜』(『日本近代文学大系 第一九卷 田山花袋集』(角川書店、一九七二年六月一〇日)所収)に拠る。

(23) 小栗風葉ほか『蒲団』合評(『早稲田文学』第三号、一九〇七年一〇月一日)。

(24) その中には、時雄と芳子との關係を氣に病む時雄の妻の心情も含まれるが、それは語り手によって拾われている。

(25) 『新日本古典文学大系 明治編 二九 風刺文学集』(岩波書店、二〇〇五年一〇月二八日)に、宗像和重校注による本文が収録されている。

※本稿は、二松学舎大学東アジア学術総合研究所（旧東洋学研究所）の二〇〇三年度・二〇〇四年度研究助成を受けた共同研究「雑誌『太陽』を中心とした〈私〉・〈日本〉表象に関する研究」の成果の一部である。『太陽』掲載の小説・文章からの引用に際しては、漢字を新字体に改め、総ルビのテキストについては難訓以外のものを適宜省略した。